

偕行社のモットーに「英霊に敬意を。

日本に誇りを。」とあるが、戦没者を慰霊することは極めて重要な行事である。

昨年の4月17日に、約200名の関係者が参集して、靖國神社において第1回偕行社慰霊祭が斎行された。当方も端午会会員を代表して本式典に参加したが、敵爾かつ莊嚴な慰霊祭であった。本来であれば、国や時代を問わず、国家のために尊い一命を捧げた将兵の御霊を慰霊・顕彰することは、国の重要な式典である。

ドイツの慰霊祭が、日本で挙行された話を聞いた。令和2年11月13日に、大分県の旧陸軍墓地があった大分県桜が丘聖地で、ドイツ大使館と大分県の連携により「第1次世界大戦ドイツ戦争俘虜慰霊祭」が実施された。

ドイツでは、毎年11月第3土曜日に戦没者やナチス党の暴力の犠牲者を追悼する記念日である「国民哀悼の日」が設定されているが、この日に合わせて、この慰霊祭は挙行されることになった。在日ドイツ国防武官のキーゼヴェッター大佐は、私の良き友人であり、この慰霊祭が実現した背景について説明を受けた。

大佐の曾祖父の弟、ユリウス・キーゼヴェッター氏は、第1次世界大戦中に青島で日本軍の捕虜となり、日本の捕虜収容所で死亡したという情報を頼りとして、防衛研究所の関係者と共に、先祖の足跡を辿ることになった。

多くの関係者の支援を受けて、大分県の桜が丘聖地内に、日本人の戦没者と共に、眠っている墓を見つけ出した。その墓には、「ユリウス・パウル・キーゼヴェッター之墓」と刻まれて、1917年5月9日に死亡したことがわかった。武官は、祖国から9000キロも離れた大分県の墓地で、100年の時を超えて、2018年9月に曾祖父の弟の墓前に立つことができた。

また、開催された慰霊祭の挨拶で「敵国だったのに、収容所でも良い扱いを受けていたことが分かり、墓も長い間、美しく手入れされており感銘を受けた。日本とドイツの深い友情の表れだと思つ。来年もぜひ訪れたい」と述べている。

武運に恵まれず、遠い異国の地で英霊となった日本の全将兵に敬意と哀悼の誠を捧げると共に、捕虜となり、異国の日本で病死した敵国の将兵にも祈りを捧げたいと思う。また、敵国の兵士の墓も区別することなく敬意を表して、100年以上の長きにわたり、細やかに管理されてきた地元の町内会の活動に深い感銘を受けた。

端午会

(陸士455期)
(陸経45期)

担当
者
二世
井上
武

端午会会報

第52号

(令和5年3月20日脱稿)

日本におけるドイツの慰霊祭について